

「現代美術と美術館—2つの立場から見る収蔵と展示—」 要旨

人文学部文化コミュニケーション学科芸術コミュニケーション分野
町田朱里

「現代美術」の分野では、素材、テーマ、展示・鑑賞形態などの様々な要素が交錯・干渉しながら「作品」が成立する。本論文では、そうした要素の多様化により収蔵や展示に課題を抱える作品に焦点を当てつつ、美術館本来の機能とは何か、そして作品を実際につくる作家は美術館に作品が収蔵されることをどう考えているのか、現代美術と美術館の関係についての聞き取り調査を交えながら考察した。

第一章では、現代美術の一つの契機として1910年代のマルセル・デュシャンの作品を挙げ、そこから現代までの美術の流れをたどることでその多様性を再確認した。第二章では、日本における現代美術館の例を取り上げながら、21世紀に求められる美術館の機能についてまとめた。現在の美術館は、「作品を収集し展示すること」を大前提の役割としながらも、さらに「町」や「地域」の一部としての役割も求められている。そこに暮らす人々や、外からやってくる人々とどのように関係を築いていくか、ということを経営者は考えなければならないということである。このように美術館が二つの大きな役割を背負っている中で、現代美術と美術館がどのような関係を築きあっているのかを考察したのが第三章である。

第三章では、現代美術作品を生み出す作家の立場と、美術館の学芸員、この二つの立場からそれぞれ現代美術の収蔵と展示に関して聞き取り調査を行った。現代美術作品のなかには、素材や展示形態の特殊さゆえに作家と美術館側の綿密な話し合いを必要とするものがあり、近年では作品が収蔵される際に、作家が指示書を作成する場合も多い。しかしそれはあくまで展示の仕方や保存の仕方などの技術的な面に関する指示であり、作品が作者の手を離れて学芸員や鑑賞者個人によってさまざまに解釈されることを作者は肯定的に捉えている。一方で、美術館に作品が収蔵されることで、本来作品がもつコンテキストが失われてしまうと考える、美術館による収集を避ける作家もいる。また、アートセンターなどによって美術館の機能が補われることも生じている。

いずれにしても、聞き取り調査の対象とした美術館の多くは、様々なケアを前提とする作品収集を、各館の収集方針にも照らしつつ、日々多くの課題を抱えながら進めている。作品を後世に残していくためには、作品保存や展示に関する研究や試行が今後さらに重視されるだろう。そうした活動がまた、美術館の可能性のみならず、現代美術の可能性をも拡張していくはずである。